

京都府立大学学術報告「人文・社会」第49号

- Martz, Louis L., *John Donne in Meditation: the Anniversaries*. New York: Haskell House Publishers, 1970
- Nicolson, Marjorie, *The Breaking of the Circle: Studies in The Effect of the 'New Sience' Upon Seventeenth Century Poetry*. Evanston: Northwestern U.P., 1950
- Hughes, Richard E., *The Progress of the Soul: The Interior Career of John Donne*. New York: William Morrow, 1968
- Lieshman, J. B., *The Monarch of Wit: An Analytical and Comparative Study of the Poetry of John Donne*. London: Hutchinson University Library, 1951
- Roberts, John R.(ed.), *Essential Articles for the study of John Donne's Poetry*. Hamden: Archon Books, 1975
- 川崎寿彦,『ダンの世界』, 東京: 研究社出版, 1967
- 川崎寿彦,「Donne の Anniversaries — Occasional Poetry としての考察」(『名古屋大学教養部紀要』第4輯), 1960

## Donne の First & Second Anniversaries 論（II）

### Seventeenth Century Poetry

川崎寿彦, 「Donne の Anniversaries — Occasional Poetry としての考察」

- 11) Martz, Louis L., *John Donne in Meditation: the Anniversaries*, p.22
  - 12) ここで Donne は Venus を Hesper と Vesper の 2 つの宵の明星としているが, おそらく 1 つは Phosphor (明けの明星) の間違いであろう。
  - 13) Manley は Litany of the Saints の supernatural hierarchy (Mary, the Angels, Doctors, Bishops, Confessors, Holy Virgins, Widows and finally all Holy Men and Women) にはば従っていて, Dante のものに似ているとしている。*(John Donne: The Annivesaries*, p.193)
- Milgate は Donne のヒエラルキーは Catholic Litany と Cranmer's Litany に依っているとする。ここで Angels, Confessors, Doctors, Bishops が省かれているのは, Cranmer に従っているのだとしている。*(The Epithalamions, Anniversaries and Epicedes of John Donne*, p.109)
- ちなみに Donne は *Litany* stzs. V - VIII で, The Virgin Mary, The Angels, The Patriarchs, The Prophets, The Apostles, The Martyrs, The Confessors, The Virgins, The Doctors としている。

### テキスト

Grierson, Herbert J. C.(ed.), *The Poems of John Donne* (Vols.1&2) (OET). Oxford: O.U.P., 1912

Craik, T.W. & R.J.(ed. ), *John Donne, Selected Poetry and Prose* (Methuen · English · Text). London: Methuen, 1986

Grierson, H.(ed.), *Donne, Poetical works* (OSA). Oxford: O.U.P., 1933

Sanders, Wilbur, *John Donne's Poetry*. Oxford: O.U.P., 1971

Smith, A. J.(ed.), *John Donne, The Complete English Poems* (Penguin English Poets). London: Allen Lane, 1974

Stringer, Gary A.(ed.); *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne* (Vol.6). Bloomington and Indianapolic: Indiana U.P., 1995

Manley F.(ed.), *John Donne: The Annivesaries*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1963

Milgate, W., *The Epithalamions, Anniversaries and Epicedes of John Donne*. Oxford: O.U.P., 1978

Potter,G. R. & Simpson, E. M.(ed.), *The Sermons of John Donne* (10 Vols.). Barkley: Univ. of California P., 1953

Simpson, E. M.(chosen), Gardner, H. & Healy T.(ed.), *John Donne, Selected Prose*. Oxford: O.U.P., 1967

### 参考文献

Cary, J., *John Donne, Life, Mind, & Art*. London: Faber and Faber, 1981

Bald, R. C., *John Donne, A Life*. Oxford: O.U.P., 1970

Walton, Izaak, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson* (*The World's Classics*). London: O.U.P., 1936 (初版1670)

Bald, R. C., *Donne and the Drury*s. Cambridge: C.P.U., 1959

Lewalski, B. K., *Donne's Anniversaries and the Poetry of Praise*. Princeton U.P., 1973

註

1) 本章については拙稿『Donne の First & Second Anniversaries 論（I）AN ANATOMY OF AN ANATOMY OF THE WORLD — 中世への絶望と近代への懷疑のマニエリスム —』（『京都府立大学学術報告 人文』第47号、1995）に詳しく論じている。

2) Grierson, Herbert J. C. (ed.), *The Poems of John Donne* (Vols. 1&2) (OET), 1912

本論文中の Donne の詩の引用はすべてこのテキストによる。但し、下線は筆者によるものである。

3) ここでは、後に出版された Martz, Louis L., *John Donne in Meditation: the Anniversaries*, p.17から採用する。

Martz はセクション I の81-84行目を Refrain and Moral, セクション II の147-156行目を Moral とし、他のセクションでは Refrain, Moral に相当する部分は希薄で Eulogy に含まれてしまうと考え、その上でそのことが The first Anniversary に比べ、セクション間のつながりをより強いものとしていると論じている。

4) *Ibid.* p.26

5) ‘A Valediction: forbidding mourning’ ll.25-36

If they be two, they are two so

As stiffe twin compasses are two,

Thy soule the fixt foot, makes no show

To move, but doth, if the'other doe.

And though it in the center sit,

Yet when the other far doth ryme,

It leanes, and hearkens after it,

And growes erect, as that comes home.

Such wilt thou be to mee, who must

Like th'other foot, obliquely runne;

Thy firmnes makes my circle just,

And makes me end, where I begunne.

6) *Oxford English Dictionary* ‘progress’ の項による。

7) 中世の宇宙観では、地球を中心とする同心円を軌道として天体が周回し、それぞれの天体に一人ずつ天使が乗っていると考えられた。地球から順に、ヒエラルキーの下位から上位へと配されていたのである。天使の乗った天体が順調に調和よく周回すれば、天上の音楽が奏でられるともされた。

8) 星は北半球の方が多い。ここでは she が宇宙そのものであり、現実の宇宙に勝る宇宙であると言っている。

9) 前述『Donne の First & Second Anniversaries 論（I）AN ANATOMY OF AN ANATOMY OF THE WORLD — 中世への絶望と近代への懷疑のマニエリスム —』参照。

virtue: The power or operative influence inherent in a supernatural or divine being, now arch. or obs. (OED)

10) Marjorie Nicolson や川崎寿彦はこの考えに基づいて議論を進めている。

Nicolson, Marjorie, *The Breaking of the Circle: Studies in The Effect of the 'New Science' Upon*

Donne の First & Second Anniversaries 論（II）

Approaches in the resurrection;

(ll.489-492)

Shee, who by making full perfection grow,  
Peeces a Circle, and still keepes it so,  
Long'd for, and longing for it, to heaven is gone,  
Where she receives, and gives addition.

(ll.507-510)

螺旋構造と語のくり返しによって読む者的心を上へ上へ、外へ外へと誘った *The second Anniversary* は原罪によって墜落した人の魂、神の真実（religious truth）の shee を失って、腐り果てたこの世を徘徊し苦悩する人の魂の、神の国への旅の遍歴（progresse）と昇華（progresse）の歌であった。くり返される ‘thinke’，‘know’，‘up’ の語からそれが上昇（progresse）の道行き（progresse）であったことが知られる。そしてその先が ‘shee’ であることも。地球を中心とした宇宙を越え、太陽、惑星を越え外周円へと向かいつつ昇ってゆく逆螺旋。行く手は広がっていく世界。その昇華の道行きを詩神ミューズ（Muse）の父なる神ともいるべき She の力を求めて詩う Donne の視点は地上にある。かくしてその全容はいとも不安定な逆螺旋構造をなす。

中世の宇宙構造から出ることなく、それでいてカトリシズムのあり様に懷疑を挟み、その上で上へ上へと不安定な螺旋を上り詰めていくルネサンスの魂と Donne の魂 — それは中世に心を残し、その影を引きずりつつ、近代の先駆けとなり、そしてまた、中世に立ち返りつつ、確実に近代を形成していく、ひずんだ不安定なルネサンス人の精神の遍歴の姿であった。

Thou art the Proclamation; and I am  
The Trumpet, at whose voyce the people came.

(ll.527-528)

*The second Anniversary* を書いた 2 年後 Donne は国教会の牧師となった。

※本稿は1997年4月26日十七世紀英文学会関西支部第126回例会における発表の一部を基に改筆したものである。

そして……

Up, up, my drowsie Soule, where thy new eare  
Shall in the Angels songs no discord heare;

(ll.339-40)

この [IV] の Meditation のキーワードは ‘up’ である。up が 7 回繰り返されてその度に魂は Mothermaid へ、 Patriarchs へ、 Prophets, Apostles, Martyrs へ、 Virgins へと天上のヒエラルキーを昇っていく (ll.345-355)。<sup>13)</sup> Heaven に逝って全き完璧さを享受している Shee の許へと昇る。そこでは 7 つの天上の軌道を司る天使たちの奏でる天上的音楽 (heavenly music) を耳にする。死に瀕して肉体から解放され、その呼気の音 (note) が音楽 (harmony) となった魂が天に昇り、そこで天使の音楽 (harmony) に触れる。魂の昇華。‘thinke’ し、‘know’ し、‘up, up’ と昇ったとき、真の歎びを知ることになる。この世での歎びはつかの間のものであり、変わらぬものと思ったとき、それこそが不変のものでありながら、そう思うことがまた移ろっていく。

Shee がいれば、この世にも真の歎びがあったけれど、それとて天 (Heaven) にあっては天のつかの間の歎びに勝るものではない。この世に歎びを得ようとバベルの塔を建てようとする者がいても地球上ではそれも叶わない。人のすることは神の冒瀆にすぎず、神を失うことにつぎないのである。

## V

Then, Soule, to thy first pitch worke up again;

(1.435)

‘to thy first pitch’ — 汝の元の高さへ、とは人が墮落する前、肉体の牢に囚われる前の次元に戻ること。また、‘pitch’ は鷹などが獲物を狙うときに一旦高く上がることをいうので、ここで Donne はいよいよ核心に触れるということを同時に示唆しているように思われる。

‘Thinke’ , ‘know’ , ‘up’ と経てきた魂の ‘progresse’ もいよいよ終着点に近づく。魂も肉体もどちらも大いなる魂であるような段階に。そこでは Elizabeth に象徴されるような ‘Shee’ と、魂の ‘she’ とが一つになる。Meditation と Eulogy も一つになって Conclusion へと導かれる。

Joy of a soules arrivall ne'r decaies;  
For that soule ever joyes and ever staies.  
Joy that their last great Consummation

Donne の First & Second Anniversaries 論（II）

Nor dost thou, (though thou know'st that thou art so)

By what way thou art made immortall, know.

(ll.254-260)

この根源的な問いかけは Donne はもとよりルネサンスの精神の底辺をなす問題であった。尤も中世においてもルネサンス後の近代においても人間にとつての永遠の問題であるのだが。ルネサンスのルネサンスたる所以はこの問い合わせを返すことにあった。人間はこの問い合わせに答えるため、様々な考察をしてきた。いわゆる科学も発達させてきた。しかし何一つ解明されていない。人間存在を四元素に求めてみても、それにもまた新たな異説が出る。解剖学が発達しても、本質的なことは分からぬ。心臓が2つの心室と心房からなることが分かっても血液がその間をどう移動するかが分かっていないように。先人の偉業が確認されてもそれ以上のものではない。人が知ろうとすることは教科書に書かれていること、教本に書かれていることにすぎず、人の存在の基の基については知ろうとしない。なぜ草は緑なのか、なぜ血は赤いのか、などは。中世であれ、近代であれ、人の知など何の価値もない。キリスト教も近代科学も何も明らかにしはしない。人の知など、人の目、人の耳を通したものにすぎない。あらゆることを直接何の愚かなフィルターもかけずに認識することはこの世ではあり得ないのだ。ここまで ‘orderly vicissitude yeares’ (1.26), ‘enspear'd’ (1.78), ‘the Star-full Northerne Pole’ (1.80), ‘quantities / Are made of lines, and lines from Points arise’ (ll.131-2), ‘Cubes … Circles, Angular’ (1.142), ‘The bladders cave’ (1.270), ‘ventricle’ (1.272) だと、‘Red seas’ (1.10), ‘spice’ (1.39), ‘The Westerne treasure, Easterne spicerie’ (1.228), ‘Mintage’ (1.224), ‘precious Gold … Copper coynes’ (ll.429-430), あるいはまた ‘Creation’ (1.23), ‘Venite’ (1.44), ‘Ingredients’ (1.124), ‘Ayre, and Fire, and other Elements’ (1.265), ‘Elements and Humors’ (1.135), ‘Labyrinths’ (1.297) などなど。古代からの知、中世の知、近代の知、所狭しと並ぶが、結局どれも信ずるに足りないとした上でのこと。自らをも嘲るようなこの詩の作りに、この詩はいよいよ Donne らしく陰鬱になってくる。この上もなくペシミスティックなペシミズムが頂点に達する頃、この2行が立ち現れる。

In heaven thou straight know'st all, concerning it,

And what concernes it not, shalt straight forget,

(ll.299-300)

だから……

Returne not, my Soule, from this extasie,

And meditation of what thou shalt bee,

To earthly thoughts, …

(ll.321-3)

出してみよう。‘her’がthe Souleを受けていると読むことも可能だという点にここでつながってくる。この41行の間に8回登場するshe（1度のshee（l.197）はvenusをさす）と3回現れるherは‘thy Soule’なのである。‘thy’は今語りかけている‘My soule’を指すという複雑な構造だが。

MartzもDonneの巧みな言葉の使い方による意味の重層性について次のように述べている  
‘This theme … emerges gradually from Donne’s magnificent view of his own soul’s flight to Heaven after death. It is essential to note that this is not “the flight of Elizabeth Drury’s soul to Heaven”, as most commentators describe it … It is Donne’s own soul which here is made a symbol of release, not only from physical bondage, but also from that mental bondage which is the deepest agony of the greatest souls.’<sup>11)</sup>と言っている。

死後の魂は肉体から離れ、肉体の速度の法則からも離れてあっという間に天（heaven）に向かう。地（Earth）から飛び立ち、Moone, Venus, Hesper, Mercury, Sunneなどの天体の軌道（sphere）を瞬時にして突き抜ける。<sup>12)</sup> 束縛から解き放れる瞬時のこととを25行も費やして（ll.185-210），これだけの長い距離を通り抜けていくのだということを感じさせる。

Donneは、宇宙についてはプトレマイオス的宇宙論を支持している。そのことは437行目で、地球のことをthe Centerと称していることにも明確に表れるが、その突き抜けていく様を表現する比喩は近代人らしく，《The first Anniversary》同様、解剖的視点に立っている。

As doth the pith, which, lest our bodies slacke,  
Strings fast the little bones of necke, and backe;  
So by the Soule doth death string Heaven and Earth;

(ll.211-3)

これが即ち‘thy long-short Progresse’（長い距離、長い迷いと苦悩を短い時間で突き抜けていく）である（l.219）。詩全編の丁度中央にあたる219行目にこの詩の中でたった一度使われる‘Progresse’の語である。Progresse—地上（Earth）から（Heaven）に向かっての上昇、進歩はthinkeすることから始まりknowすることがそのprogresse（道行き）なのである。

ところで[IV]の前半のMeditationの39行目に13の‘know’又は‘knowest’がみられる。この世で肉をまとっているときの知は、自らのことすら知らないという最も卑小な知なのである。

Poore soule, in this thy flesh what dost thou know?  
Thou know'st thy selfe so little, as thou know'st not,  
How thou didst die, nor how thou wast begot.  
Thou neither know'st, how thou at first cam'st in,  
Nor how thou took'st the poyon of mans sinne.

Donne の First & Second Anniversaries 論（Ⅱ）

Thinke thee laid on thy death-bed, loose and slack;  
And thinke that, but unbinding of a packe,  
To take one precious thing, thy soule from thence.

(ll.91-5)

一つ一つの音が、当時流行の華やかな装飾音に飾られて、天上の音楽（heavenly music）にも紛う調べとなる。この世から放たれてアダムとイヴの墮落（Fall）以前の世界へと至る‘progresse’を可能にするものこそ死なのである。

この場面で、神や天使の目から隠そうともせず破廉恥な姿を晒してきた人の世を恥じて、天国に向かう死者の目から今更あわてて隠そうとする愚かな人の姿が風刺されて（ll.109-112），ここにも Contemptus Mundi がはっきりと現れる。

続く [Ⅲ] はこの詩の 1 つの中心部となるが、前半 157 行目から 78 行目までの 22 行の間に ‘thinke’ が 7 回、41 行に亘る後半では、最初に 3 回現れる。「魂の解放としての死」を認識するために死を迎える前の魂の姿を認識しなければならない。わずか 2 ヤードほどの皮膚に囲まれた小さな小さな国、1 国を誇ったところで病や死（腐敗や悪や滅亡）に悩まされ続けなければならない 1 夜の宿の如くはかない国に囚われる身にすぎないということを。

Thinke further on thy selfe, my Soule, and thinke  
How thou at first wast made but in a sinke;  
Thinke that it argued some infirmitie,  
That those two soules, which then thou foundst in me,  
Thou fedst upon, and drewst into thee, both  
My second soule of sense, and first of growth.

(ll.157-162)

そもそも人の魂は、Soule of growth (Anima Vegetalis) と Soule of sense (Anima Sensibilis) の 2 つの魂から成り立っていて、これらはそれぞれ成長 (growth) と運動 (motion)，消滅 (corruption) と知覚 (perception) を担い、それ故限りある生をもつ (mortal) ものでしかないのである。人は原罪により肉体からのがれられなくなった魂の姿を知らねばならない。そこから魂を解放するのが死であることも。ここで今迄小文字で表されていた魂 (soule) が大文字になっているのは偶然のことではない。[Ⅲ] の Meditation では 5 度続いてくる全ての soule が大文字になっている。その後の詩行の中では 339 行目 ‘my drowsie Soule’ と 435 行目の ‘Soule’ の 2ヶ所のみが大文字である。更にこの Meditation では前半に ‘Thinke’ がくり返されるが、後半では最初に 4 回出てくるのみである。その代わりに目につくのが she (her) の頻出である。今まで多く ‘shee’ と綴っていたのが、ここではほとんどが ‘she’ である。タイトルを思い

The world is but a carkasse; thou art fed  
By it, but as a worme, that carkasse bred;  
...  
Forget this world, and scarce thinke of it so,  
...  
Men thus Lethargique have best Memory

(ll.49-64)

ところで各セクションの Meditation は Soule への命令形での呼びかけで構成される。曰く、

Thirst for that time, O my insasiate soule,  
And serve thy thirst, with Gods safe-sealing Bowle.

(ll.45-6)

神の救いを約束する盃で渴くままに飲み干せと。渴くことが大切で、渴を満たすべく貪欲になることを求める。飲みすぎて水痘にかかり、更に渴くほどに。又曰く、

Look upward; that's towards her,

(1.65)

これは [I] の Eulogy の冒頭の 1 行であるが、崩壊したこの世を思うより、「上を見ろ」、「死んだ彼女を見上げろ」というのはこの詩のテーマを予見させる。上に目をやり、上に向かって進んでいくのがまた progress なのだから。次に [II], [III] での ‘thinke’ , [IV] での ‘knowe’ , [V] での ‘up’ に目を向けたい。

## IV

[II] では36行に20回の ‘thinke’ が繰り返され、死について考えることが促される。死の床での最後の弱々しい呼吸の notes (1つ1つの音) は divisions (分散和音や隣接音などの装飾音) となり、美しい音楽 (harmony) となる。死に向かう弱々しい途切れがちな呼気が、実は楽曲を豊かにする装飾音で、果ては麗しい調べとなるのは、次に詩われるようすに、死が魂の解放に他ならないことを暗示する。

And thinke those broken and soft Notes to bee  
Division, and thy happyest Harmonie.

## Donne の First & Second Anniversaries 論（II）

り、Eulogyにおいては、Shee (She) が頻繁に使われて、いやが上でも Shee への讃美が募る。‘Immortal Maide’と三度呼ばれているが、Shee はそもそも永遠の生を有した (immortal) 完璧な存在なのである。ここでは女性としての理想像というニュアンスは全く出てこない。彼女のかいたこの世には真の歓び (essential joy) があったし、Golden Age の香りがあったというが、それは彼女自身がこの世にあってもそもそも完全な存在であるからに他ならない。卑近なところでいうならば、彼女は一国 (State) でもあって、どんな権力 (royaltes) も有している (ll.359-360) ([V])。新世界でもあって、西方にあっては貴金属の資源、東方にあっては香辛料をも有し、ヨーロッパもアフリカも、その他の全ての地でもある (ll.228-230)。宇宙でもあって、彼女自身のどの部分にも天使を配しても然るべきと思われる (ll.235-240) ([III])。<sup>7)</sup> 瞳も地球そのもののように、おまけにその南半球にもいっぱいの星がある (ll.78-80) ([I])。<sup>8)</sup> 肉体 (body) と魂 (soul) の分裂もほとんどなく肉体は決して魂の牢獄 (soul's prison) ではない (ll.241-3) ([III])。彼女を形づくるものは四元素だが、第五元素まで入っているかもしれない。それも完璧な割合で混じり、それ故どの気質 (Humour) もバランスがとれていてどれかが勝っているということはない (ll.123-4, 135-6)。どんな立方体 (Cube) をもってしても、円 (Circle) をもってしても彼女の傍に持ってくればゆがんで見えるほどである (ll.141-2) ([II])。天国の楽園 (Paradise) は彼女とともにあり (l.77) ([I]), 世界の知の全ては彼女に内在する (ll.303-4) ([IV])。それは深い宗教心故に ‘virtue’ を養ったからであり (ll.75-6) ([I])<sup>9)</sup>、直接神の存在を観、声を聴いて話すことができ、偶像などを必要としない (ll.451-4)。神と契りを結び、天 (Heaven) に行った今、神と結婚した (ll.461-2) ([VI])。まさに至福の状態 (happy state) にあるのである (l.65) ([I])。

[I] では30行の中に11回、[II] では26行中に5回、14行中に6回と現れる ‘shee’ であるが、[V] では2回しか使われず、その代わり who…の節が8回つづく。Shee…, Shee… という疊み掛けはないが、実に濃密に、我らが皆賞でていたのは Shee なのだ、この世でもこんなに神の近くにいた Shee なのだと。The second Anniversary は Shee の死を悼む詩である。Elegy の観点からすると Shee の死への深い悲しみと慰めの後の部分を担うのがこの第2作であるというのがひとつの説であり<sup>10)</sup>、そういう意味では Shee が死にはしたけれどいかに至福の時を迎えているかを詩う Eulogy がこの作品の中心部分となるであろう。しかし、先に述べたようにこの作品のテーマを *progresse* とみれば、それはむしろ Meditation にあるといわなければならない。

Meditation の底に通奏低音のように流れているのはこの世の蔑視 (Contemptus Mundi) の世界観で、The first Anniversary のあの陰鬱な詩行から流れ続いているものである。この世は死体のようなもの、人は死体にたかる蛆虫のようなもの、腐り果てた死体が蘇ることなど求めるな、この世など考える価値もない、と。

Forget this rotten world; ...

...

Shee, shee not satisfied with all this waight

(

...

... ) is gone

As well t'enjoy, as get perfection.

(ll.315-8)

Shee, shee doth leave it, and by Death, survive

All this, in Heaven;

(ll.379-80)

To fill the place of one of them, or more,

Shee, whom we celebrate, is gone before.

(ll.447-8)

Who being here fil'd with grace, yet strove to bee,

Both where more grace, and more capacitie

At once is given: she to Heaven is gone,

(ll.465-7)

Shee, who by making full perfection grow,

Peeces a Circle, and still keepes it so,

Long'd for, and longing for it, to heaven is gone,

Where shee receives, and gives addition.

(ll.507-510)

### III

この世の病いを純粹な自らの内に、むしろ育みそだてて死んだ彼女は、実はその完璧性 (perfection) を享受すべく自ら天 (Heaven) に旅だった。死によってこそ天で生き、墮落した天使の欠落を埋め、その能力をいやまして神の恩寵を受ける。それは彼女が望んだことでもあり、求められたことでもあったのだと。ところで、*The first Anniversary*では‘proportion’（その意味はものの形の比率、特に天の軌道の比率、天体間の調和、天と地との調和、またそれらの調和が保たれたときに奏でられる音楽のハーモニー、などさまざまであるが）がキーワードであったが、*The second Anniversary*ではどうであろうか。各セクションが Meditation と Eulogy から成

Donne の First & Second Anniversaries 論（II）

His eyes will twinkle, and his tongue will roll,  
As though he beckned, and cal'd backe his soule,  
He grasps his hands, and he pulls up his feet,  
And seemes to reach, and to step forth to meet  
His soule;

(II.9-17)

天文学や航海術そして音楽 — 新しい世界に広がっていこうとする言葉がちりばめられる一方で、彼女の死は a new Deluge, 即ち私たちにとっての罰としての大洪水なのだと、キリスト教的世界観からの言葉もみられる。そんな苦悩の世界の中で詩人は生 (life) を求める。彼女を求める。が、彼女を讃える Hymnes を生むことがこの世を完全な腐敗から救うのではないかとこの詩に立ち返ってくる。(II.30-48)

*The second Anniversary* は以上の The Entrance (導入) に続いて 7 つのセクションに分かれ、Martz のことばに従えば、それぞれに Meditation (瞑想) と Eulogy (讃歌) が含まれ、最後の Conclusion (結論) へと progresse していく。ところで、この詩のタイトルとなっている progresse は①前に進むこと (the action of stepping or marching forward or onward), ②旅をする、巡礼する (journeying, travelling), ③進歩していくこと (advancement, growth, development), ④上昇すること (going to a farther or higher stage, advance), ⑤国王、貴人、高位聖職者などの公的旅行、巡幸 (A state journey made by a royal or noble personage, or by a church dignitary) といった意味である。<sup>6)</sup> しかし、*The first Anniversary* における ‘anatomy’ と違ってこの語は *The second Anniversary* を通じてたった 1 語しか見られない。しかも、セクションごとにくり返されるリフレインも微妙に変化していく。

So struggles this dead world, now shee is gone;  
For there is motion in corruption.

(II.21-22)

Shee, shee is gone; she is gone;

(I.81)

Shee, shee embrac'd a sickness, gave it meat,  
The purest blood, and breath, that e'r it eate;

(II.147-8)

Shee, shee, thus richly and largely hous'd, is gone:

(I.247)

以上のように7つのセクションに分けるのは Martz に従う。が、Moral は置かず、全セクションを Meditation と Eulogy に分けて考えたい。<sup>3)</sup>

7 (seven) については Donne が *Essays in Divinity* の中で ‘Seven is ever used to express infinite’ と述べていることを指摘しつつも、Martz 自身は、魂の上昇していくプロセスの7つの段階を意識しているようである。<sup>4)</sup> 7の象徴性についてはいうまでもないが、このようにこの詩の構造を考えると、*The first Anniversary* と同様、プレマイオス的宇宙の広がりが見えてくる。即ち、地球（この世）（Earth）から天（Heaven）に向かう同心円的な広がりが。とはいえる。*The first Anniversary* では1つ1つの円が ‘And learn'st thus much by our Anatomy’ の1行でしめくくられ、円として完結していくが、*The second Anniversary* では違う。それぞれの円の上で Shee（彼女）の死んでしまった後の世界に思いをいたし、翻って我が身の、人の魂の卑小さ、不完全さを顧みる。これらの内省（Meditation）は、それ故に彼女への讃美（Eulogy）へつながり、天国での彼女の更なる全き姿へと想いが及ぶ。というように1つの円から次の円へといとも自然につながっていく。いわば螺旋を描いて昇りつめていくのである。

螺旋構造はマニエリスム美術作品の好んで用いた構造であった。コンパスの比喩では円を描く方の足は正確に出発した地点に戻って円を描くのだが<sup>5)</sup>、ここでは Donne の描く線は元には戻らず上昇していく。いびつな円を描くのである。しかしこのいびつな円は上から見ると全き円になっているという不思議な円。面では成立しない立体ならばこそ成立する世界。最早プレマイオス的世界観では認識できない世界、認識しきれない世界を Donne は観ている。

*The second Anniversary* では、彼女が死んだ、というより、彼女が天国へ逝ってしまった、のリフレインで progresse（進行）していくが、リフレインの先駆けは ‘Since both this lower world's, and the Sunnes Sunne, / The Lustre, and the vigor of this All, / Did set;’ (ll.4-6) の3行である。*The first Anniversary* からくると、「この世の太陽、太陽の中の太陽、光の全て、活力の全て」とは即ち Shee であることはすぐに察せられる。光もエネルギーも最早なく、それでも地球はまわり続ける。しかしその世界は永遠なる存在（everlasting）であるなどとはいえないのであるから、これほど虚しいことはない。帆船が走り、リュートの音を響かせたこの世も、処刑があいついだこの世も同じ1つの世——自然の摂理に従えば秩序ある歳月の経巡り（orderly vicissitude of years）なのかもしれないこの世には秩序などない。(ll.1-26) 斬首刑にあった人間の切り離された首と胴体から共に生の証の血が流れ出し、2つの Red Sea を形成する。渡れば東洋へ、もっと広い世界に出て行けた紅海だが、それが2つあったとて何になろう。どくどくと血を流しつつ soul を求める首と胴——何というグロテスクな世界の姿か。

Or as sometimes in a beheaded man,  
Though at those two Red seas, which freely ranne,  
One from the Trunke, another from the Head,  
His soule be sail'd, to her eternall bed,

Donne の First & Second Anniversaries 論 (II)

<b>ENTRANCE</b>		ll.1-44 So struggles this dead world, now <u>shee is gone</u> ; For there is motion in corruption. (21-2)
[ I ]	<b>Meditation</b>	ll.45-64
	<b>Eulogy</b>	ll.65-84 <u>Shee, shee is gone</u> ; she is gone; (81)
[ II ]	<b>Meditation</b>	ll.85-120
	<b>Eulogy</b>	ll.121-156 Shee, shee embrac'd a sickness, gave it meat, The purest blood, and breath, that e'r it eate; (147-8)
[ III ]	<b>Meditation</b>	ll.157-219
	<b>Eulogy</b>	ll.220-250 <u>Shee, shee</u> , thus richly and largely hous'd, <u>is gone</u> : (247)
[ IV ]	<b>Meditation</b>	ll.251-300
	<b>Eulogy</b>	ll.301-320 <u>Shee, shee</u> not satisfied with all this waight, ... ...                    ) <u>is gone</u> As well t'enjoy, as get perfection. (315-8)
[ V ]	<b>Meditation</b>	ll.321-355
	<b>Eulogy</b>	ll.356-382 <u>Shee, shee doth leave it</u> , and by Death, survive All this, in Heaven; (379-80)
[ VI ]	<b>Meditation</b>	ll.383-446
	<b>Eulogy</b>	ll.447-470 To fill the place of one of them, or more, <u>Shee whom we celebrate</u> , <u>is gone</u> before. (447-8)  Who being here fil'd with grace, yet strove to bee, Both where more grace, and more capacitie At once is given: <u>she to Heaven is gone</u> , (465-7)
[ VII ]	<b>Meditation</b>	ll.471-496
	<b>Eulogy</b>	ll.497-510 <u>Shee</u> , who by making full perfection grow, Peeches a Circle, and still keepes it so, Long'd for, and longing for it, <u>to heaven is gone</u> , Where shee receives, and gives addition. (507-10)
<b>CONCLUSION</b>		ll.511-528

OF THE  
PROGRESSE  
OF THE SOULE

*Wherein,*

By occasion of the Religious death of  
Mistris ELIZABETH DRURY,  
the incommodities of the Soule in  
this life, and her exaltation in  
the next, are contemplated.<sup>2)</sup>

最初の Anniversary では She が時ならぬ死 (untimely death) をとげたため崩壊、腐敗したこの世を解剖によって調べ、その腐敗ぶりを徹底的に認識し、この上なく陰鬱な詩行をくりひろげた。第 1 作目のテーマが ‘anatomie’ であったように、第 2 作目では ‘progresse’ がテーマになるであろう。Elizabeth が死んで 2 年目を迎えたが、ここでは彼女の死を宗教的な死 (Religious death) であったとしていることに注意を向けたい。もう 1 点注意を払わなければならないのは、このタイトルの下から 2 行目 ‘her exaltation’ の ‘her’ の示すものである。もちろん Mistris Elizabeth Drury をさすのであるが、the Soule をも指していると読める。shee (she) が誰なのかは *The first Anniversary* においても、さらに当然 *The second Anniversary* においても問われるのであるが、このタイトルにまさにその答えの一つが暗示されているといえよう。

*The first Anniversary* は、先に述べたように ‘Shee, Shee is dead; Shee's dead;’ という沈鬱な詩行のくり返しにより、同心円が描かれるように進む。そしてそのたびに世界への悲しい認識が深まるのである。*The second Anniversary* においても同じようなりフレインがみられるが、今度は dead ではなく gone が使われる。‘Shee, Shee is gone, She is gone.’ と。ここにもこの 2 作目の Anniversary を解く鍵がある。さらに 1 作目では執拗に、まるでとりつかれたように ‘Shee is dead’ がくり返されるのであるが、*The second Anniversary* では少し様子が違う。

ここで *The second Anniversary* の構造を見てみよう。その構造については諸説あるが、1947年に Louis L. Martz が ‘John Donne in Meditation: The Anniversaries’ (*English Literary History*) で唱えた説が適切と思われ、その説に従うこととする。多くの研究者もこれを採択している。

# Donne の First & Second Anniversaries 論（II）

## THE PROGRESS OF THE RENAISSANCE SOUL IN OF THE PROGRESSE OF THE SOULE

### — ルネサンス精神の遍歴：中世と近代の連続性 —

岡 村 真紀子

#### I

1610年、14歳で世を去った一人の少女 Elizabeth Drury に詩人 John Donne は追悼詩を捧げた。Donne が追悼詩を少女に捧げたのはお金のためであったらしく、その父親 Sir Robert Drury の依頼を受けたからであった。その後1612年に、彼は Drury 夫妻と共に外遊するが、*The first Anniversary* を出版したのはその旅立ちに先立ってのことであった。Donne が毎年 ‘Anniversary’ を彼女に捧げるつもりであったことは *The first Anniversary* に ‘Accept this tribute, and his first yeares rent’ (1.447) とあることに伺われる。彼は *The second Anniversary* でも ‘for my second yeares true Rent’ (1.520) と詩ってその意思を表しているが、実際には Anniversary は2作しか発表されなかった。

*The first Anniversary* は ‘Shee is dead’ が5度くり返され、その度に彼女が死んで崩壊した世界の実情が認識されていく。Introduction と Conclusion の部分を入れて、7つのセクションのつみ重ねで成り立つこの *The first Anniversary* には ‘An Anatomie of the World’ のタイトルがつけられているが、Farmer は ‘The Anatomical Theatre at Leiden’ を意識していたのではないかと指摘する。この構造は、最も古いボローニャ大学の解剖教室の構造ともよく似ていて面白いが、地球を真中において解剖し、回りに重層的に円を描いて複数の視点をおくという構造はプトレマイオスの宇宙論の構造にほかならない。このように *The first Anniversary* はプトレマイオスの宇宙論の構造の中で近代医学的手法の「解剖 (anatomy)」を使う。そしてキーワードとなったのは、話の中心をなす4度目のリフレインの中で詩行中に10回くり返された ‘proportion’ なる語であった。<sup>1)</sup>

#### II

さて、2作目の Anniversary は次のようなタイトルをもつ。